

北のとびら

K i t a n o T o b i r a

特集
演劇

インタビュー

劇作家・演出家 泊篤志

ピックアップステージ

釧路子どもミュージカル
「キッズロケット」

in

2012 宜蘭国際童玩芸術節



HOKKAIDO
ARTS FOUNDATION

95

平成25年1月

道内で活躍する
親しみやすさを感じさせながらも
新しい作風の作家をご紹介します。

アートギャラリー / 第二十六回「陶芸」

● 石川久美子

学び続ける。創り続ける。



音器 (オンキ) / 2008
H69 × W32 × D22 cm

cube pig / 2008
H52.5 × W79 × D45 cm



自分にしかできない仕事をした
思って会社を辞めたとき、出会ったのが
陶芸だった。オブジェを創り続け、やがて
初めての展示会に出品。自分としては
大きいと思っていたはずの作品は、会場
に置くと、がっかりするほど小さかった。
技量の低さを思い知り、作家としてこ
れではいけない。という意識に目覚めた。
追求したいのはオリジナリティー。他
の作家がしないことをやりたくて、パツ
チワーク的な作品づくりを始めた。その
後、いろいろな曲線を組み合わせる作風
や、好きな音楽から得たイメージを具現
化する作品も増えた。

海外研修のときに、美術館通いをし
た影響で、今、絵画とその技法に興味を
持っている。これからは銅版画などの技
法や、ガラスなど他素材との融合に挑
戦してみたい。それは対象を知らない
できないこと。知りたいから学ぶ。知りた
いことが生まれ続ける限り、学び続け
る。だから、創り続けていける。

今、私の作品を気に入ってくれる人
が増えているのがうれしい。「帰って作品
を見ると癒される」「心が弾む」。そんな
言葉をもらうと、「ああ、私はこのまま
進んで行っていいんだな」と思う。(石川)

石川久美子さんの作品を、財団事務局内の「アトスペース」で展示します。
会期 / 平成25年2月8日(金)～3月19日(火) 平日9:00～17:00 ※詳細は当財団ホームページをご覧ください。

お知らせ



北海道文化財団では事業を通じ
多様な文化を未来へと紡いでいます。
今回は、演劇にかかわる事業を
中心に取り上げ、ご紹介します。

表紙

釧路子どもミュージカル「キッズロケット」の第13回公演
「百年の仲間たち」(2011年)より

もくじ

02 アートギャラリー / 石川 久美子

04 インタビュー / 泊 篤志

06 ビックアップステージ /
釧路子どもミュージカル
キッズロケット

08 共催事業レポート

- とままえ町民劇公演
「ルドルフとイッパイアッテナ」(苫前町)
- たきかわ市民劇公演
「思いはいつも言葉に足らず」(滝川市)

10 文化活動の基礎知識 / 森一生さん
目に見えない心の動きを表現し
人間を描いていく演劇の奥深さ

12 地域からのお便り /
美しい唄が
聞こえるようになるまで(美瑛市)

13 アートのチカラ /
子どもたちの声っていいな
～福島キッズの映画撮影体験～

14 この街この人 / 浦河町



緑と地球環境保護のため、古紙100%の
再生紙と植物油インクを使用しています。



音響 (イノト) / 2005
H60 × W55 × D23 cm

黒猫のアリスが変身したら〜 / 2012
H35 × W15 × D25 cm



撮影協力: ギャラリー三日月

石川 久美子

Kumiko Ishikawa

函館市出身。平成9年から佐藤留利子氏に師事し、平成15年から作家活動を
開始。翌年、函館市の助成金を得て海外(ドイツ/セバスチャン・シャイト氏の工
房、イタリア/リチャード・ジノリススタジオジャンボ)で研修。平成22年に独立し、
studio claynote 設立。函館が拠点の陶芸家の一人として、道内外での個展・
グループ展などに出品している。

泊篤志

「飛ぶ劇場」代表・劇作家・演出家

結成25周年の劇団「飛ぶ劇場」。
目指すは、日本最強の地域劇団。

「飛ぶ劇場」はもともと、北九州
市立大学で演劇をやっていたメン

道内の若手演劇人の進化を呼び起こす、シアターラボ札幌にける情熱
北海道舞台塾「シアターラボ札幌」は、道内・札幌の若手演劇人のスキルアップを目指し、
演劇界で注目の劇作家・演出家の2人をドラマドクターとして迎え、
2年間にわたり脚本・演出・演技を指導するプロジェクト。そのドラマドクターの一人・泊篤志さんに、
道内の演劇について、そしてシアターラボへの意気込みを伺いました。

「飛ぶ劇場」は25周年を迎え、主な
俳優たちは30代後半になりました。
夢みたいなことだけと、彼らが50代に
なっても役者を続けられる劇団にし
ていくことがこれからの目標。ペテラ

らにその後も私が監修し、イトウワ
カナの演出で上演。「これで札幌と
の縁も終わりかな」と思っていたタイ
ミングが「シアターラボ札幌」でした。
今回はまず戯曲講座を行います

グ・ワンタフル。が現れてきます。瞬
間、瞬間に何か素晴らしい出来事が
起るはずなので、「シアターラボ札
幌」でも、常にそれを意識して取り
組んでいきたいです。



泊さんの戯曲講座は、平成24年12月3日(月)・4日(火)の2日間、北海道文化財団の会議室で開かれ、若手劇作家6人が参加。初日はシナリオづくりと起承転結の付け方を学び、2日目はそれぞれが実話を基にした物語を創作し、互いに話し合いました。さらにシアターラボの1年目の集大成として、平成25年3月に上演される「劇団アトリエ」の作品タイトル案も全員で持ち寄り。投票の末、「彼女のスプレックス」に決まりました。

バーが集まって昭和62年に旗揚げした劇団。私は在学中にある二つ作品の公演だけにかかりましたが、卒業後、いったん東京で就職。しかし、しばらくして、劇団が解散しそうになつていたこともあり、平成5年に仕事を辞めて劇団に復帰。平成7年から代表になつていきます。かつては小劇場ブームに乗って、走りまわってギャグを飛ばすようなカラーの劇団でしたが、ヒマラヤの山小屋での実体験を描いた「ジエンド・オブ・エイジア」をはじめ、私が代表になつてからは死生観の色が濃い芝居が増えたように思えます。また、平成9年に「生態系カズク」で日本劇作家協会の新人戯曲賞を受賞してからは、活動の幅も全国へ広がってきています。

と若いメンバーが一体となり、ほかに例を見ない最強の地域劇団を目指していきたく思っています。公演から講座、若手の育成へ。北海道との縁はまだまた続く。北海道とのかかわりは、平成19年の札幌・コンカリーニョで「飛ぶ劇場」20周年公演を行ったのが最初です。その後、コンカリーニョから戯曲講座の依頼をいただき、再び札幌に訪れることになったのです。30歳前後の若手・中堅の作家を集めて行われた戯曲講座では、最終的にイトウワカナが書いた「歯並びのきれいな女の子」をリディングというスタイルで上演。翌年には本格的に上演する運びとなり、札幌に1ヶ月間滞在して演出を行いました。さ

だが、最近の若い人は書くのは上手くても、作家としての根っこがないのか、「結局何を書きたいの?」という人が多い。まず、自分が何を描きたい人間なのかを見つけること。そして、起承転結など、基本的な構成を学んでほしいと思います。道内・札幌の演劇界は、30代の中堅が元気でですね。そして、上には40代が頑張っていて、20代もうごめいている。民間劇場も元気がよしい、北海道文化財団などのさまざまなサポートもある。とても恵まれた環境だと思えます。自分たちの拠点である北九州からみれば、実にうらやましい。シアターラボの2年間で若手作家の心の奥を開かせたい。シアターラボは、一人の劇作家が2年間にわたって一つの劇団を指導する試み。2年がかりで行うプロジェクトは、他の地域でもそんなことはありません。長く付き合う中で、どこまで若者たちが成長できるのか、若者たちの内部にどんな進化を起すことができるのか。今回は小佐部明広くんが率いる「劇団アトリエ」とペアを組むことになりませんが、彼が持っている世界を掘り進み、その奥に何があるのかを見つけていきたい。例えるなら、それは徳川埋蔵金を一緒に掘り当てる作業をする時間だと思っています。演劇は、言葉と言葉のやりとり。人と人との間には、必ず、サムシン

Message for Hokkaido

北海道に届けたいメッセージ

北海道という土地を訪れるのは、毎回新鮮で楽しくて、身になるものは全部取り込もう、行けるところまで行ってみたいと思っています。北海道には開拓の気心が、「開拓ってスゴイ!」「人間の繁殖かってスゴイ!」と、あちこちで感じています。特に札幌の演劇人はスゴイ人がたくさんいるので、かかわっている人は楽しいだろうと思います。反面、「札幌の演劇はこうだね!」というカラーが意外と出ていない。どこかスッキリしているんですね。独自の匂いを感じさせるような作品が出てくれば、このまちの演劇はもっと面白いことになるはずです。

泊 篤志 (とまり あつし)

福岡県北九州市生まれ。大学在学中より演劇の執筆・演出を始める。卒業後はゲーム制作会社に入社するが、2年ほどでUターン。以降、「飛ぶ劇場」で脚本・演出を担当。平成7年より劇団代表を引き継ぎ、平成9年には「生態系カズク」で第3回日本劇作家協会新人戯曲賞受賞。新しい要素を取り入れつつも娯楽性を忘れない作風が特徴。現在は「北九州芸術劇場」のローカルディレクターとして、九州演劇界の底上げを担っている。

北海道舞台塾
シアターラボ札幌

広く北海道民に質の高い演劇を提供し、演劇文化の浸透と活性化を図るとともに、地域の舞台芸術を担う人材を育成することを目的として演劇公演の創作を行う事業です。平成24年度は道内の若手演劇人のスキルアップのため、道外で活躍している劇作家・演出家をドラマクワターに迎えて脚本、演出などに指導をいただきます。



釧路子どもミュージカル キッズロケット

in 2012 宜蘭国際童玩芸術節 (イーラン国際子ども芸術フェスティバル)

平成24年7月28日(土)～7月31日(火) 会場/宜蘭縣冬山河親水公園(台湾宜蘭県)

小・中学生の子どもたちが、毎年3月の定期公演に向けて新作のミュージカル作品を上演している「キッズロケット」。

平成24年に結成15周年を迎えた同グループのミュージカル作品は、歌・ダンス・演技とも、実力は全国でもトップレベルと高い評価を受けています。また、ミュージカルで培った歌唱力とダンスを生かしたミニコンサートも積極的に開催されており、毎月のように地域のイベントに出演。観客からの応援を、パワーに変え、イキイキとしたライブ感が人気を集めています。

そして、平成24年7月には初の海外公演として、台湾で毎年夏期に開催されている「2012宜蘭国際童玩芸術節」に参加し、3日間で4ステージ、その他3回の交流会でプログラムの部を披露しました。練習期間は3カ月。当初はミュージカル作品を公演する予定でしたが、歌詞を現地語に映すテロップの機材が十分でないとのことと、歌とダンスを中心とした演目とし、普段のレパートリーだけでなく台湾の童謡も練習して演じました。

世界18カ国から30団体が集い、各チーム1ステージ40～60分のステージを繰り広げる芸術節で、キッズロケットは日本のポップスやアニメ主題歌など台湾の人たちにもなじみのある曲や、地元の人なら誰でも知っているという童謡「Dew Dew Dongg」、そして地元アイヌ族と共通点のあるアイヌ

釧路子どもミュージカル キッズロケット

多くの可能性を秘めている子どもたちに「ミュージカル」に参加する機会を設けるため、平成9年に発足。年1回の定期公演のほか、クリスマスコンサートなどの活動を通して、子どもたちの友情や連帯感を育み、釧路の地域文化活動を担っています。

台湾公演のスケジュール

- 7月27日(金)
台湾省、宜蘭へ移動
- 7月28日(土)
リハーサル後、
礁溪公園ステージにて第1回目公演
- 7月29日(日)
親水公園ステージにて
午前午後と2回公演
- 7月30日(月)
午前、地元の育英小学校と文化交流
午後、親水公園ステージにて
4回目の公演
夜は「日本の日」パーティー
- 7月31日(火)
宜蘭県知事への表敬訪問
主催者による宜蘭近郊観光
夜、地元タイワル族参加者との
文化交流会
- 8月1日(水)
台北へ移動
亜東関係協会、台北動物園表敬訪問
- 8月2日(木)
釧路へ移動



釧路市動物園が台北市立動物園にタンチョウを貸与した縁で存在を知った「2012宜蘭国際童玩芸術節」。私たちの演目は新鮮で、大いに盛り上がりました。平均年齢10歳の、他の団体よりも幼い小さな子どもたちが見せた頑張りも、熱い声援をいただく理由となったようです。自分たちのやってきたことが認められ、大きな自信となりました。

宿舎で他国の団体と交流したり、地元小学校を訪問したりと、ステージだけでなく朝起きて寝るまですべてが文化交流。病気もホームシックもなく、みんながとてもよい経験をしました。今後も機会があれば、また出演させていただいて、日本の「今」を発信していきたいです。

これまでの積み重ねに自信を得た初めての海外公演



釧路子どもミュージカル
キッズロケット
代表 金安 潤子



民族の歌などを披露。サビの歌詞を現地の言葉に替えるなどの工夫を凝らしたステージはどれも盛況で、観客と一緒に歌い出すほどでした。

また、5泊した宿舎では、世界各国の出演者たちとも親睦を深めました。「日本の日」と題したキッズロケット担当の夕食会では、子どもたちが手作りの巻き寿司やそうつんを振る舞い、日本の最新ポップスを歌とダンスで紹介しました。

文化交流事業
(発信交流事業)

道内において舞台芸術分野(音楽、演劇、舞踊等)で活動している文化団体が道外または海外で行う公演に対して助成を行います。





全員そろっての練習がなかなかできなかったが、本番では全員の思いが異事につになり、会場を沸かせた



まちの文化創造事業・シアタープログラム

Report 1

とままえ町民劇公演
井の中のカワズたち
ルドルフと
イッパイアッテナ

苫前町



作品の公演で、町民劇は確実に苫前のまちに浸透。そして平成23年の春、第4回公演に向けてキャスト、スタッフの募集が始まります。

演出はプロの演劇集団「劇団たんぼ」の台本をアレンジした「ルドルフとイッパイアッテナ」。斎藤洋の児童文学を原作に、迷い猫ルドルフと親分肌の猫イッパイアッテナが都会で生活しながら、生きる楽しさや厳しさを知るといふ物語です。

それまでの成果でしようか、子どもたちの応募が非常に多く、「断腸の思いでお断りしなくてはなりませんでした」と「井の中のカワズたち」代表の松岡満雄さんが振り返ります。広円寺住職、町の文化協会会長というさまざまな顔を持ちながら、とままえ町民劇公演実行委員長を務める人物です。

演出担当は前2作に引き続き、苫前小学校の校長岩村直幸先生。「井の中のカワズたち」を創設した本人です。なるべく多くの子どもたちを舞台に上げるために、ダンスの場面を創作して追加する配慮を行いました。

4回目を迎え、より高まる町民の期待を受け、「層のレベルアップを目指して北海道文化財団のワークショップに参加。ボイストレーニングなど参加者の基礎力の底上げを試みました。

稽古は夏休みから本格化し、週

に3回行われましたが、小学生から高校生、社会人まで、日々忙しいメンバーが全員そろつことはなかなかありませんでした。それでもスタッフ内で稽古のための代役を立てるなど、工夫しながら磨き上げたのです。

そして迎えた12月11日、それまでの練習の成果を1度きりの舞台上で上演する時が来ました。

町の公民館に集まった約300人が舞台を堪能し、エンディングにはステージと客席が一体となって「上を向いて歩こう」の大合唱となりました。これが町民劇の醍醐味です。これからも、絶やすことなく、苫前に町民劇の火が燃え続けることでしょう。

とままえ町民劇のあゆみ

- 平成20年度 ■町民有志の劇団を結成
- 平成20年度 ■3月 北海道文化財団のアートプロデュース体験事業として旗揚げ公演「風受けて」を上演
- 平成21年度 ■1月 第2回公演「1939-インディギルカ号」を上演
- 平成22年度 ■12月 第3回公演「冒険者たち〜ガンバと仲間たち」を上演
- 平成23年度 ■アートプロデュース事業「演劇を体験する」講座を受講し、スキルアップを図る
- 平成23年度 ■12月 北海道文化財団の共催事業(まちの文化創造事業)、第4回公演「ルドルフとイッパイアッテナ」を上演
- 平成24年度 ■12月 「地球光りなさい」を上演



滝川市

たきかわ市民劇公演

思いはいつも 言葉に足らず

平成23年10月のある夕暮れ、たきかわホールの舞台上で「たきかわ市民劇」のメンバーが喝采に包まれてました。同年の6月に公募で集まり、仕事や学業と両立しながら稽古を重ねてきた皆さんです。

演目は、脚本と演出を人気劇団「劇団イナダ組」代表のイナダヒロシさんが手掛けたことで話題となった「思いはいつも言葉に足らず」。高校生から30代を中心とした役者14人、舞台美術や衣装を手がけるスタッフ約10人の市民が、力を合わせて上演しました。

イナダさんは、札幌から滝川まで毎週のように足を運びました。その演出はともユニークで、大きなテーマを決めておき、具体的

なセリフや演出は役者本人のキャラクターをみながら決めていくスタイル。市民劇公演を企画・運営したNPO法人空知文化工房の事務局長・長田千秋さんは、「あらかじめ脚本があるのではなく、稽古を重ねながら脚本もできあがっていきまし」と、参加者の個性を最大限に生かすイナダ流の演出を興味深く振り返ります。

稽古はかなり厳しかったそう。イナダさんは常に「セリフは暗記するものではなく、心の中の思いから自然に湧き出てくるものでなくてはならない」と語り、キャストをやる気にさせました。公演後にみんなが「稽古が一番楽しかった」と語ったとおり、公演は大成功を収め、市民劇の注目度が高まりました。

平成24年11月には、新たな顔ぶれの市民による音楽劇「どんぐりと山猫」を上演。前年の好評を受けて市民の期待も大きく、チケットは早々に完売し、急遽、公演を2回に増やします。「非常にうれしいことでした」と長田さん。市民劇の復活を願ったのは、「滝川で育つ子どもたちに舞台で輝くチャンスを与えたかった」からです。公演が増えたことで、「どんぐりと山猫」に出演した11人の子どもたちが輝く回数も倍になりました。

実は滝川市では平成19年まで市民ミュージカルを上演し、好評を博

してました。しかし市民主体での運営が困難になり中断。以来、市民劇が再開されるまで一般市民が舞台上上がるチャンスはほとんどなかったのです。

平成23年の「思いはいつも〜」にも今回の「どんぐりと山猫」にも、かつて市民ミュージカルに出演していた子どもたちの応募がありました。「前に楽しかったから」という子どもたちがほとんどでした。

「今後も、こんなように舞台を楽しめる子どもたちを育てたい。子どもと大人が共演できる市民劇を続けていきたい」と語る言葉に、長田さんたちの熱い願いが込められているのを感じました。

たきかわ市民劇のあゆみ

- 平成13年度 ■ 8月 第1回 たきかわ市民ミュージカル「あいと地球の競売人」上演
- 平成16年度 ■ 3月 第2回 たきかわ市民ミュージカル「あいと地球の競売人」上演
- 平成19年度 ■ 11月 第3回 たきかわ市民ミュージカル「シレニアの歌」上演
- 平成22年度 ■ 6月 北海道文化財団まちの文化創造事業の支援を受け、市民劇公演を再開。参加者を募集
- 10月 弦巻啓太氏脚本による「吐く息より白く、暖かく」を上演。イナダヒロシ氏に次年度の脚本・演出を打診
- 平成23年度 ■ 6月 市民劇公演第2弾に向けてキャスト、スタッフを募集
- 8月 イナダヒロシ氏を迎え、稽古を開始
- 10月 「思いはいつも言葉に足らず」を1公演のみ上演
- 平成24年度 ■ 11月 音楽劇「どんぐりと山猫」を2公演行う
- 2月 北の元気舞台 地域間交流公演に参加

「思いはいつも言葉に足らず」の稽古風景



「どんぐりと山猫」の最終リハーサル

TAKIKAWA

学 校 演 劇 の た 足 跡 づ くら みた 舞 台 づ くら みた

だ から
舞 台 は
白 い

第3回

目に見えない心の動きを表現し 人間を描いていく演劇の奥深さ

高校演劇は、北海道の演劇において欠かせない柱の一つ。その作品には先人たちの苦労や熱い思いが詰まっており、深く知るほどに舞台づくりの面白さが見えてきます。第3回は、舞台に息づいている、心々に注目し、舞台美術などを使った人間の描き方に迫ります。

人の心をどう浮き彫りにし、生きた人間を生み出していくか

前回、舞台美術が演劇的な「時間」や「空間」を表現する上で欠かせないお話をしましたが、舞台美術は登場する「人間」を描く上でも大切な役割を担っています。演劇で人間を描く際に最も大事なことは、いかに舞台の上に、生きた人



藻岩高校が昭和54年の全道大会と、翌年の全国大会で上演した「明日は元気」は、「魚眼レンズでのぞいたような青空が広がって、流れる雲が幾何学模様をつくって美しい」というト書きで始まる秀作。ト書きをそのまま具象化したような青空と雲の2つの背景が、測候所で働く日常と、洞爺台風によって測候所が壊されてしまった非日常の景観を表すと共に、主人公の心の安定と不安という心象も見事に映し出している。

間を生み出せるかに尽きます。最近ではセリフの言い回しやクセ、小ささといった目に見える動きで、キャラクターを増やしていますが、外に現れる表層的な部分だけでは、観客の心をゆさぶり、酔わせることは難しいでしょう。それよりも「なぜそういう言い方をするのか」「なぜそんなクセを持っているのか」といった深いところで人間を捉えること。セリフという言葉と、動きが生み出す、身体。そして、その人間の内面を映し出すこと。心の3つを理解し、表現することで初めて、生きた人間を舞台上に生み出していくのです。学校演劇においても、いい劇には、いつの時代も、生きた人間が登場し、多様な個性が息づいています。



昭和56年の全道大会と翌年の全国大会で上演された札幌開成高校「水仙月の四日」は、宮澤賢治の原作をベースに、吹雪の大地で一つの命が消えていくのを、透明な美しい世界を創り出して高い評価を受けた作品。「死」は一般的に恐怖感を与えるものだが、主人公のポジティブな心を反映した舞台表現によって美しいものへと昇華させることに成功している。

文・写真協力 森 一生

昭和42年に札幌静修高等学校演劇部の顧問に就任。以降、長年にわたって高校演劇の指導に尽力し、同校を2度の全国優勝に導く。北海道高等学校文化連盟「高文連」演劇部の事務局長も務め、北海道の高校演劇のレベルを全国トップクラスまで引き上げた功績は高く評価されている。

人間としての心の喪失を表現した「山月記」

「山月記」は、高校の国語の教科書によく取り上げられる中国の変身譚を基に書かれた中島敦の小説。詩人として名声を得ようとした主人公の李徴が人食い虎となつてしまい、友人の袁傚との再会を通

して自身が虎になった経緯を述懐していく物語です。

この「山月記」を、平岸高校では平成21年の全道大会、札幌静修高校では昭和59年の全道大会と翌年の全国大会でそれぞれ上演。2校とも舞台上に月を登場させながらも異なる使い方で、登場人物の、心を描き出しています。



札幌静修高校の「山月記」は、消えそうなくらい細い月を浮かび上がらせることで、李徴が持っている人間の心が消えていく最後の瞬間を表現。人間としての心を喪失する悲しさや叫びが伝わっている。



平岸高校の「山月記」では、李徴と袁傚の心の距離を月で表現。友情が満たされている序盤は満月だが、次第に細くなっていくことで、虎と人間という物理的な距離感、そしてお互いの切なく、悲しい想いを感じさせてくれている。



札幌啓北商業高校が平成23年の全道大会で上演した「はるにれと少年」では、舞台上の「はるにれの木」に心情を投影。葉をいっぱいつけた木によって喜びを、葉のなくなった木で哀しみを表現するなど、主人公たちに替わって喜怒哀楽を表現している。

地域で行われているユニークな活動の紹介を、寄稿文でお届けします。

平成24年度
舞台創造
支援事業

美しい唄が 聞こえるようになるまで

美唄市

劇団弦巻楽団代表 弦巻 啓太

2年前の「そらち演劇フェスティバル」で観た「美唄市民劇団 WA!」の芝居は、とても荒削りなものだった。しかし、そこには人前で表現する喜びに満ちた、劇団員の瑞々しい姿があった。ただ、みんな目の前の台詞をこなすのに精一杯で、共演者の声や姿が目に入っていないような印象も受けた。

ワークショップでは、まずどんな人たちがよく知るために、みんなに自分について話してもらった。どんなふうに話すのか、どんな表情を見せるのか。だが、一番注目していたのは「どんなふうに人の話を聞くか」だった。こうした稽古は聞き疲れて徐々にタレてくる。そんな時、どんなふうに話を聞いているか。その人の根気強さや、真摯さが現れる瞬間だからだ。

身体を使った稽古を交えながら、10月までは毎回のように入テュード(即興劇)を行った。それも想像を働

かせるエチュードではなく、世間話を繰り返す、日常を繰り返すエチュード。5分ほど世間話をして、それを再現してもらおう。表現する喜びに溢れた彼らは、初めは「何が」を足してしまいがちだった。生活＝物語がそこに現れる前に、ついつい面白げな「何が」を足してしまふ。その気持ちには痛いほど分かる。が、実際には「何か」はむしろ会話の生々しさを失わせてしまふ。そんな「何か」はいろいろな。なぜなら、みんなの会話はそのままでも魅力的なのだ、というのが僕が伝えたかったことだったからだ。

11月には、平成25年3月の公演の脚本が完成した。「火星から来た女の子」という、美唄で取材し、そこに生きる彼らの話を聞き、劇団員の床屋で髪を切り、生まれた物語である。本読みをすると、エチュードで培われた変化が現れていた。「何が」を付け加えずに表現することを心掛けた結果、彼

らは周りの言葉を以前より聞けるようになっていて、自分の表現だけで終わらずに、つながり合っていて物語を描けるようになっていたのだ。今冬の「そらち演劇フェスティバル」でも、リーディング公演だったが彼らの成長をハッキリと確認できた。

結果としてこの半年、「聞く」ということが今回のテーマだった気がする。僕が行ったのは「唄うのではなく、美唄で生きる彼らの生活の唄を聞こえてくるようにすること」。

そう言い換えることができれば、もしかもしれない。3月には「火星から来た女の子」を本公演として上演する。誰も唄わない作品だが、彼らの姿から聞こえてくる唄を、どうか聞きに来てください。



そらち演劇フェスティバルの交流会



美唄市民会館でのワークショップの様子



劇団員を指導する弦巻さん(左から2人目)

舞台創造支援事業

地域で創造的な演劇・音楽などの舞台発表活動に携わる皆さんと、舞台づくりの講座やワークショップなどの舞台制作のプロセスを体験しながら、舞台公演を上演する事業です。

アートのチカラ POWER OF ART

東日本大震災の被災地で行われている、文化芸術活動による支援事業にかかわる方から寄せられた“現在進行形”の声をお届けします。



むかわ町
特別

From TOHOKU

子どもたちの声っていいな

～福島キッズの映画撮影体験～

田んぼdeミュージカル委員会事務局

齊藤 征義

町民プールの建物から、子どもたちの歓声があふれてくる。町の通りにもはしゃぎ声が響く。「子どもたちの声っていいな」。バス停でお年寄りたちの笑顔がほころぶ。「何年ぶりだ。大勢の子どもたちの声は」。過疎と学校統合により、子どもたちのにぎやかな声が消えてしまった今、走り回る子どもたちの声が、懐かしいだけでなく、町全体を明るく、わくわくさせてくれるようで、お年寄りたちの会話も弾む。

東日本大震災で被害を受けた福



福島の子供たちがお年寄りを元気にした

島県の子どもの夏休みを特別でと、札幌のNPO法人と地元の団体が受け入れた。農業や林業体験、カヌーでの川下りなどのプログラムの中に、「映画撮影体験を」お年寄りたちとの交流を」との相談があり、映画をやりたくてたまらない高齢者映画集団「田んぼdeミュージカル」のお年寄りたちが、また一本短編映画を描いた。

子どもたちは70人。撮影は約1

週間、子どもたちの撮影班が実際にカメラを回し、映画撮影の現場体験をすること、その様子を私たちが記録する。ロケ地はクビナガリユウ

や大きなアンモナイト群が展示されている野外博物館。特別は化石発掘で知られている。この奇怪な白亜紀の世界に迷い込んだ子どもたちが突如現れた。アンモナイトばあさん。

や、クビナガじいさん。らと歌い、踊り、冒険するシーンから物語が始まる。

子どもたちの撮影班はカメラ、録音、照明、それに監督がモニター画面を見ながら「よい、スタート」をメガホンで叫ぶ。助監督の子どもがカチンコを鳴らす。それぞれ私たちのスタッフが指図をするのだが、「カット、もう一回」の音が何度もかかり、覚えるまでが大変だった。それでも子どもたちは、飽きずに取り組んだ。「田んぼdeミュージカル」の名優たちは「このくらいでは、まだまだ大丈夫」と先輩ぶりでいつもより元気である。

今から2500万年前の白亜紀、この一帯は海だった。太古の海の中から生命が生まれきたというこの映画のストーリーを、子どもたちはどのよう

の？「半袖でいいの？」「木に触っていい？」「芝生に本当に寝ころんでいいの？」と聞いてくる子どもたちの目が、たちまち輝き始める。ラストシーンは、町の中のメタセコイア並木の通りいっばいに、子どもたちとお年寄りたちが、にぎやかなダンスを繰り広げる。映画のタイトルは「歌うぞ 踊るぞ 海の森で」「サウンド・オブ・サウラー」の副題も付けた。「サウラー」は恐竜の女性名詞である。

映画は約30分。DVDにして、子どもたち全員に贈られることになった。子どもたちが大人になってから、そして年老いてから、このDVDを取り出す時を想像する。子どもや孫たちに、どのように語るだろうか。この「海」のことを。





この街 この人

第22回

人から人へ。一人から大勢へ。アートの可能性は、人を通して無限に広がっていきます。地域の文化を支えているさまざまな方たちを通して、北海道各地の文化を紹介します。

浦河町

<http://www.town.urakawa.hokkaido.jp>

日高振興局

面積…694.25Km²

総人口…13,712人(平成24年12月末現在)

人口密度…19.6人/Km²

隣接自治体…新ひだか町、様似町、

広尾町、大樹町

町の木…日高五葉松

町の花…日高ヤマツツジ



映画館「大黒座」館主
三上 雅弘さん

町の人々に支えられ
老舗映画館を守り継ぐ

上映作品の手作り立看板を眺めながら館内へ入ると、チケット売り場でネコのんびりとお昼寝中…。浦河町市街にたたずむ「大黒座」は、古き良き、町の映画館。の姿が今も息づく48席のミニシアター。大正7年に芝居小屋として開業し、現在は4代目の三上さん



JoJo-Family
村下 智恵子さん / 木田 千鶴さん

舞台づくりを通して
つながる人の輪と絆

3歳から50歳代まで幅広い年齢層のメンバーからなる「ジョジョファミリー」は、バンド演奏と、歌やダンスによって舞台を展開する音楽サークルです。
メンバーとして活躍している村下さんと木田さんは、平成8年から参加。キャスト、スタッフすべて



日高定置漁業者組合 事務局長
清水 勝さん

漁業者が結束して取り組む
鮭のブランド化

黒潮と親潮がぶつかり合う日高沖は、日本有数の好漁場。秋には、「銀毛」と呼ばれる最高級の鮭が水揚げされる名産地です。
かつては全道でも高い浜値がついていたときもありましたが、鮭・マスの養殖事業の拡大や輸入物の増加に伴い、取引価格が下降。



① 一戸 八栄子さん

[IKASUカレッジ 主宰]

平成14年、地域活動や栄養士の経験を生かし、子どもたちの休日の有効活用のため、食をテーマとした体験型講座「IKASUカレッジ」を開講。さまざまな職業の講師を招き、小学生と保護者を対象に、地元食材の魅力や調理の楽しさを伝えている。

② 田中 郁子さん

[浦河絵画クラブ友の会]

平成9年、浦河絵画クラブ友の会に入会以来、北海道美術協会展に作品を出展。平成11年の初入選を皮切りに毎年入選を続け、平成23年には「再生～大切なもの～」(人物画・コラージュ)にて最高賞である北海道美術協会賞を受賞。

③ 津澤 静子さん

[浦河華道協会会長]

昭和44年、浦河華道協会創設。町内の小学校や福祉施設で華道を指導するほか、自治会女性部を対象とした教養講座などで講師を務めるなど地域の文化活動の活性化に貢献。平成3年より北海道いけばな連盟理事を務める。浦河町文化協会会長。

④ 藤内 正寿さん

[上野深風雲神威太鼓保存会 会長]

昭和53年、創作芸能として誕生した「上野深風雲神威太鼓保存会」。地域イベントをはじめ、平成20年には「北海道洞爺湖サミット歓迎和太鼓合同演奏会 北響祭'08」に参加するなど、道内各地での演奏活動に取り組む。

⑤ 伏木田 光夫さん

[西洋画家]

浦河町生まれ。北海道を代表する西洋画家。武蔵野美術学校西洋画科卒業後、浦河町で創作活動を開始し、昭和44年、日本美術家連盟研究員として渡仏。平成元年より全道展事務局長に就任する。平成10年、伏木田光夫美術館が開館。現在、札幌市在住。

⑥ 村下 望さん

[浦河女声コーラス「コール・リュミエール」指導者]

浦河第二中学校の音楽教諭を務めながら、「コール・リュミエール」を指導する。町民芸術祭や道民芸術祭などへ参加するほか、平成22年には創立30周年コンサートを開催。平成23年「北海道文化団体協議会奨励賞」を受賞。

がクリーニング業を営みながら館主を務めています。

「昭和50年に3代目の父を手伝い始め、割引券の配布、石炭のボイラー焚き、映写機回しと、何でもやりましたよ」。時代の流れとともに客足が減り、週末のみ営業という危機もありました。

しかし、どんなときも三上さんは「町の声」に耳を澄まし、上映作品を選び続けました。そんな姿を知る地元の人々が、「大黒座を守ろう」と「サポータークラブ」を結成。会員になり5回映画を観ると「お誘い券」がもらえ、友人や家族に贈ってPRするユニークな仕組みが生まれました。「経営的には厳しいですが、お客さんの喜ぶ顔が見たくてね」。

大黒座は、そんな館主と町の人々の、映画愛に守られているのです。

▶ 大黒座

浦河郡浦河町大通2-18

上映は1日3回。手作り感あふれるロビーには、映画のチラシや関連記事が並ぶ(右)。現在の建物は平成6年に改築したもの(左)



公募による浦河町民ミュージカルに子どもたちが出演し、自らも裏方スタッフとして加わったのがきっかけでした。それまで無縁の世界でしたが、すっかり舞台創作の虜に。町民ミュージカルが終わった後、仲間と共に「ジョジョファミリー」を結成し、町の総合文化会館などで行われる公演に向けて日々練習に励んでいます。

「幕が開く瞬間の高揚感と、終わったときの達成感が魅力です」と、口々に楽しさを語る2人。舞台上演奏する曲はすべてオリジナルで、現在では約80曲もあるそうです。

「子どもたちの成長も喜びのひとつ。転動したメンバーが演奏をするために訪ねてくることもあるんですよ」。

音楽から生まれた人の輪は、今後もさらに拡がりそうです。

▶ JoJo-Family

<http://pub.ne.jp/espava/>



平成23年、浦河町総合文化会館で行われたオリジナルミュージカル「明日に向かって」。曲はもちろん、衣装や舞台装置もすべて手作り。

そこで日高産銀毛の価値をもっとアピールしよう」と日高の定置漁業者が結束し、まずは全国から公募した中からブランド名を「銀聖」に決定。本格的にブランド化を目指す「銀聖プロジェクト」が生まれ、今年で12年目を迎えます。

規格を日高沖で捕れた3.5キロ以上の銀毛に限定し、1尾毎にプロジェクト委員会認定業者のラベルを添付することに。また、漁業者自ら各地のイベントに出向き、PR活動に励みました。

日高定置漁業者組合の事務局長・清水さんは、「消費者の『ホントにおいしい!』という言葉を直接聞けて自信が湧きました」とこり。

今ではますます注目度が高まり、全国各地に銀聖ファンが増えています。

▶ 日高定置漁業者組合

<http://www3.ocn.ne.jp/~teichi42/>

ブランド名のほか、ロゴマークも公募によるもの(左)。日高沖で捕れる週上前の銀毛は、文字通り銀色に輝き、脂が乗って味もいい(右)



文化の宅配便開催事業



ウィンドアンサンブル・ポロゴ
一緒に音楽を作ろう！
～木管五重奏の楽しみ

作品についての解説を交えながら、さまざまな楽曲を演奏します。木管楽器の解説や、耳なじみのある曲も盛り込んだ楽しい演奏会です。

新ひだか町

日時 平成25年2月10日(日) 13:30開演
会場 新ひだか町福祉センター 三石本町
(新ひだか町三石)

札幌室内歌劇場
北竜町コンサート
「童謡・唱歌の楽しみ」

1990年発足の「アナリーゼによるオペラ表現研究会」を前身とし、以来、唯一毎年欠かず事なくオペラを上演してきたオペラ団体です。古典から現代のクラシックのオペラ作品はもとより、作曲家 岩河智子による、唱歌・童謡・愛唱歌を物語仕立てにした独自の作品を上演してきました。

北竜町

日時 平成25年2月17日(日) 14:00開演
会場 北竜町公民館



北海道舞台塾事業

北の元気舞台
地域間交流公演
かでの演劇フェスティバル



1部 開場14:00 / 開演14:30

たきかわ市民劇
「宮沢賢治歌劇場 どんぐりと山猫より」
作・宮沢賢治 作曲・萩京子 演出・伊藤明子 伴演・劇団「鶴の事務所」

2部 開場15:30 / 開演16:00

砂川市民劇団 一石「雨」
原作/脚本・南出ひろみ 脚色・一石 演出・千場美恵子、一石

ツアーバス

観覧ツアーバスに乗って応援に行こう！
(滝川・砂川発着)

料金/お一人様1,500円 ※事前申し込みが必要です

日時 平成25年2月10日(日)

会場 かでの2・7 かでのホール
札幌市中央区北2条西7丁目道民活動センタービル

ご用意しているのは、心地よい時間
庭園という名のホテルでお逢いしましょう。

ご宿泊 ご宴会 ご会合 ご婚礼



RESTAURANT
スピカ
四ッ飯店
地下レストラン
【味の会】



ホテル札幌カーテンパレス 〒060-0001
札幌市中央区北1条西6丁目(道庁南側)
TEL:(011)261-5311 FAX:(011)251-2938 URL:http://www.hotelgp-sapporo.com/

リフォームや設備工事を通じてお客様の利便性や居住空間の快適性に貢献します。

タカ・プロジェクト合同会社

札幌市北区新琴似2条12丁目7-2

お問い合わせ先：090-6443-9003

- ・外壁工事
- ・台所などの水廻り関係一切
- ・フローリング工事
- ・内装工事

